

仏様のおはなし新シリーズ第61集その2 「指月のたとえ」

こんにちは。福岡市城南区にございます妙泉寺若院の木村誉です。

その昔お釈迦様は、夜空に浮かぶ月を指差しながらお弟子様方に対し「私は、あの月をあなたの方に指し示すことはできるが、月を見るか見ないかは、あなた方の自由意志に任されている」とお説きになりました。ここでの「月」は真理を、そして「指」は経文の表面上の語句を表します。つまりは、「仏説の真義をよりどころとして、経文の表面上の語句にとらわれてはならない」という戒めです。これが有名なお釈迦様の「指月の喩え」です。

私がこの話を知ったのは今から2年前、ちょうど私が得度式を受けるために京都で研修していたときのことでした。研修中のご講義の中で、龍谷大学教授の嵩満也先生がこのお例えをお話くださったのです。ちょうど仏教を学びたてで、真宗の難解な言葉の海の中で今にも遭難しかけていた私にとっては、この「指月の喩え」は、大変すがすがしいものでした。しかし、同時に素朴な疑問が湧きました。それは「指しか見ない人をどうすれば月のほうに向けさせることができるだろう」というものです。

私は講義が終わって控え室に戻られた嵩先生のもとを訪ねました。自己紹介も早々に、失礼承知でお尋ねしました。「僕はこれから僧侶となつて来年にはお寺に帰るのですが、もしご門徒さんがさっきのお例えでいう「指」ばかり見ていて「月」を見なかったら、僕はどうかやってご門徒さんを「月」の方向に向けさせてあげればよいのでしょうか？」と。すると先生はこうお答えくださいました。「それはね、阿弥陀様にしかできないんだよ」と。一般家庭の生まれで仏教も真宗も理解していなかった私は、その先生のお答えを何かインテリチックなご冗談かと勘違いし、「いやあこれは一本とられました」と大笑いしてしまいました。しかし、先生はいたつて真剣な眼差しで「いや、本当なんだよ」と仰いました。

私はやつと事の重大さに気づきました。「ああ、冗談じゃなかったのか……」でも、阿弥陀様にしかできないってどういうことだろう？そして、それじゃあ私は一体何のために僧侶になるのだろう」。ここから、「他力本願」という大きなみ教えをお聞かせいただく、真宗僧侶としての、私の本当の歩みが始まったように思えます。

今でも迷いに迷いを重ねる私をいつも原点に帰らせてくださる、嵩先生との大切な思い出の一コマでございました。

